

## 針仕事のポエティックスーなぜ服は物語を紡ぐのか

平芳 裕子

(美学会・神戸大学)

服を選ぶ、服を買う、服を着る。誰もが服をめぐる行為を日常的習慣として繰り返している。しかしながら「服を作る」ことは、なぜこんなにも困難な時代となってしまったのだろうか。映画『繕い裁つ人』とその原作漫画に描かれた「仕立屋」のイメージから、19世紀産業革命時代の絵画や雑誌における「お針子」像を振り返りつつ、さらに現代日本の若手ファッションデザイナーたちの物語と日常性への執着にも触れながら、「服を作る」ことの今日的課題と現代的意味について考察する。

2015年に公開された映画『繕い裁つ人』は、池辺葵による漫画の実写版である。主人公の市江は、映画では神戸の山手の洋館、原作では名の知れぬ街の和風住宅で洋裁店を営み、先代の仕立てた服を修繕したり、馴染みの取引先におずかな服を卸している。一着だけの特別な服を一針一針思いを込めて縫うことが市江の仕事であり、市江の服作りへの信念は人としての生き方に重ねられる。このような「繕い裁つ人」の姿には、興味深いことに、19世紀の欧米で「お針子」という名のもとにさかんに描かれたイメージが引き継がれている。産業革命の時代には、トマス・フッドの詩やリチャード・レッドグレイヴの絵画をモデルとして、薄暗い屋根裏部屋で縫い物に明け暮れる貧しいお針子の姿がさかんに描かれた。これらのイメージの出現は、虐げられた社会的弱者に寄り添う正義の主張というよりもむしろ、急速な技術的進歩と社会変革に対する人々の不安が「お針子」を美化した結果と言える。なぜならお針子像が頻出したのは、歴史的には長らく女性の仕事であった服作りが織機の改良と紡績機の発明を経てミシンの実用化を控えた時代、すなわち家庭内の女性たちが家事労働としての服作りから解放されようとする時代であったからだ。布や服に女性をつなぎ止めようとする社会的欲望が、お針子像を頻出させたと言える。そしてこのお針子のイメージは、現代の物語である『繕い裁つ人』にも残像のごとく立ち現れている。仕立屋を自負する主人公は、かつての屋根裏部屋のお針子のように、街の喧騒から離れて一人静かに縫う女性である。それは徹底したマーケティングと迅速な商品化を特徴とするファストファッション全盛の現代において、布から引き剥がされた女性性と歴史性を呼び起こす物語なのだ。

そして現代日本の若手ファッションデザイナーたちの服作りにおいても、物語への関心は顕著である。一見変哲のないように見える服であっても、実のところ、服が作り出される背景には物語が設定され、細部には物語を宿した装飾が施され、服は物語を演じる人物と場面が設定された舞台において提示される。服を着る個別の身体、さらにはその身体の属する環境が服作りのプロセスに読み込まれているのだ。消耗品と成り果てた服の歴史と記憶を思い起こし、削ぎ落とされてきた剰余を取り戻そうとする試みが、現代ファッションにおける物語への関心、という一つの潮流を生み出しているのではないだろうか。